



Title	『大阪大学日本語日本文化教育センター 授業研究』 第12号 刊行にあたって
Author(s)	
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2014, 12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50790
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『大阪大学日本語日本文化教育センター 授業研究』

第12号 刊行にあたって

本センターは1954年に留学生別科として設立され、1991年に留学生日本語教育センターへと改組、そして、予備教育開始50周年と本学の国立大学法人化を契機として、2005年4月に教育と研究のいっそうの充実を目指し、日本語日本文化教育センターへと改称いたしました。その後2007年、合併により大阪大学日本語日本文化教育センターとなって、現在に至っています。2011年には「日本語・日本文化教育研修共同利用拠点」に認定され、名実ともに日本における日本語・日本文化教育の中心的存在として教育・研究活動を進めています。

これまで、研究留学生、学部留学生、教員研修留学生、日本語・日本文化研修留学生などさまざまな留学生を多数受け入れ、その間、留学生の多様なニーズに応えられるよう教育カリキュラムの工夫・改善を重ねてまいりました。よりよいカリキュラムの開発には、日頃の教育の中から生み出されてきた方法論や教材論を共有し、蓄積することが肝要であると考え、本センターでは2003年3月に、専任教員、非常勤講師がともに自由に日頃の成果を発表できる場として本誌の創刊号を刊行いたしました。また、このほかに、教育の質の向上を目指して、さまざまなFD研修活動を行っています。

大学の活動は研究と教育という二つの柱を中心として展開することを基本としますが、多くの大学では、研究成果に関する紀要は発行していても、教室における活動の内容の報告やカリキュラムの改善など、教育の分野について報告する紀要はごく少数です。もちろん実際に授業内で使用する教材を開発して発行することは多々ありますが、本誌はそのようなものともまた性格を異にし、その意味できわめてユニークなものと自負しております。

周知の通り、非常勤を含む全ての教員の教育業績評価は、教室における実際の教育活動とともに、その成果の公開ということが、従来からきわめて重要な要素でありました。大学を取り巻く情勢に鑑みますと、今後はその成果公開という方面が教員ひとりひとりに対し一層厳しく要請されることと予想されます。12年は年齢の一回りとなりますが、12号を迎える本誌が、今後ともそのような成果公開の場であり続けることができれば幸いです。

2014年3月

『大阪大学日本語日本文化教育センター 授業研究』

編集委員会